

1962年ウガーディのババの御講話

内面の進歩

あなた方が旧年を送って迎え入れた新年には、シュバクルト〔吉兆〕というおめでたい名前が付いています。この元日を、聖者ティヤーガラージャ〔ラーマの帰依者で南インドを代表する18世紀の音楽家〕に敬意を表することでお祝いするのは、まさしく、このおめでたい年を祝う、おめでたい方法です。私はあなた方を祝います。

私がよく、お祭りを開会するために開会式にやって来るのは、私がそれを自分がそのために降臨した仕事の一部だと感じているからです。実は、今日私は、ティヤーガラージャが住んでいた地方から真っ直ぐここにやって来ました。

私は、ここ、聖地ティルパティにいるあなた方の誰もが、この地を自らの家とした神、シュリーニヴァーサ神〔ヴェンカテーシュワラ神〕への信愛で満ちているというわけではない、ということに気づきました。ここの人々のほとんどは、シュリーニヴァーサ神の施し、すなわち、神の「財産」や「布施」で生活しています。シュリーニヴァーサ神の寺〔ティルマラー・ティルパティ寺院〕からの収入は、大学や病院の運営、その他さまざまなことに利用されています。それは、言い換えるなら、何万人もの人々に、幸福で満たされた生活を与えているということです。私は人々が神の収入で生活していることに文句をつけているわけではありません。というのは、もし、その収入を貧しい人や飢えている人のために使わないなら、神はいったいそれを何に使うのでしょうか？ しかし、ここで警告を付け加えますが、もし、多く食べすぎるなら、災難が干渉してくるでしょう。自分の苦役に値するだけの量を食べなさい。というのは、骨の折れる仕事をして得た空腹は、立派な大義名分だからです。あなた方にこの寺社の財産を消費する資格を与える苦役とは何ですか？ 神が認める骨折り仕事とは何ですか？ 霊的な苦役、霊的な骨折り仕事だけが、あなた方に神聖な分け前を得る資格を与えることができます。瞑想とナーマスマラナ〔唱名〕だけが、身震いするような信愛の感動に精通しているのです！

偶像崇拝は未開のしるしではない

インドの真の文化は、サティヤ(真理)、ダルマ(正道)、シャーンティ(平安)、プレーマ(愛)という四本の柱の上に建てられた建物です。あなた方の誰もが皆、この事実を知っていなければなりません。もし、このことを知っていれば、これよりも耐久性のない文化に影響されることはないでしょう。爆弾で守らなければならないような文化は、自らを立たせている柱の一本はプレーマであるなどと主張することはできません。パーラタ〔インド〕は、何千年も前から全人類の平和と幸福のために国民が祈り、苦役を重ねてきた土地です。人々は邪悪な人種が大虐殺に成功するようにと祈ったことなど一度もありません。

あなた方にあびせる、丸太や石を崇拝する未分化の未開人などという批判を、識別なしに鵜呑みにしてはなりません。偶像崇拝は未開のしるしではありません。そうではなく、偶像崇拝は新婦の額のクムクムの丸い点と同じように、重要で意味深い習わしです。偶像は神のスワルーパ(生きた姿)として崇められ、すべてのもの、すべての場所に遍満している神が、祈願され、像として見られ、永遠で普遍なるものの中に消え去ることを切望する清められた心で、うやうやしく接近されます。こうした態度は、プラパッティ、すなわち、成就のための全託と呼ばれています。

ハートの寺社に真理を祀りなさい

この態度がなければ、礼拝は中身の無い、無駄なものとなります。たった今、私の話を聞いて、信心と

不屈の精神を育てようと決断しても、この場を離れた後にその決意を実行しないなら、意味はありません。バクティ[信愛]は、涙や上機嫌といった外側のしるしによっては量れません。バクティは内面の改革であり、あらゆる価値と見解が変容することです。あなた方は、プラーナ[インド神話]の講談の間、歓喜したのか、大泣きしていた女性の話を聞いたことがあるかもしれません。その日、語り部のバーガヴァタルは大喜びでした。というのは、自分の講談で、少なくとも一人の悔恨する魂から反応を得ることに成功したからです。その日の講談も終わりに近づいたとき、バーガヴァタルは、その老女のバクティを喜んで、そのシュラッター(信心)とサーダナ(霊性修行)への賞賛として、神聖なティールタ[聖水]を一さじ差し出しました。ところが、老女は語り部が主張するバクティをことごとく否定して言いました。

「私はバクティだとか言うものは知りませんし、シュラッターだの、サーダナだのといったものも知りません。なぜ私の目から涙が流れたのかをお話ししましょう。あなたが椰子の葉でできた本を結んでいた太くて黒い紐が、他界した私の夫が腰に巻いていた紐を思い出させたんです。遠い昔に、夫は黒い紐を身につけていたんです」

単なる外見的なしるしは、それを見る人を欺きますが、神という、遍在でつねに油断のない照覧者を欺くことはできません。

バクティはプレーマ[神聖な愛]を育てます。なぜなら、バクティはプレーマそのものだからです。現在、この国は派閥と敵対するグループでいっぱいです。彼らは、皆で力を合わせて、それぞれの能力と全力を尽くすといったことをしません。そのせいで、この国は、よその国や人に助けを求めて資金を借りざるを得なくなり、その利子の返済やら何やらで自分たちの首を絞めているのです。協力もなければ、共同体や国、あるいは人類のために自分の利益を犠牲にするという志もありません。どの村もパルチザンのグループ[労働者や農民などで組織された非正規軍]によって分裂させられています。

その種の村に何が起こったかをお話ししましょう。ある一派は「ランカーダハナ」(ランカー炎上)の芝居を得意としていました。ところが、別の派が、それではなく「ハリシュチャンドラ王」の物語を上演することに決めてしまいました。チャンドラマティー女王の役は、「ランカーダハナ」の派から選ばなければなりませんでした。というのも、もう一つの派には代わりを務められるような役者がいなかったからです。一幕、二幕と芝居は進み、王子が蛇に咬まれて死ぬところまでは万事上手くいきました。ところが、そこで母であるチャンドラマティーが泣くのを拒否したのです！「息子」が敵対する派に属していたからです。そこで、ハリシュチャンドラはチャンドラマティーに復讐しました。彼はチャンドラマティーに固い一撃をくらわせたのです。お芝居は、憎悪と派閥争いという、まったく別の流れに沿って疾走していきました。

内面の世界の光明を切望しなさい

その結果、「ランカーダハナ」の一派のアーンジャネーヤ[ハヌマーン]が、最後に尻尾で火をつけるという役柄で舞台上がってきて、自分の取り巻きたちを喜ばせるために芝居小屋に火を放ち、敵方を仰天させました！あなた方は、「ハリシュチャンドラ」の劇か「ランカーダハナ」の劇か、どちらかを上演しなければなりません。同じ舞台でどちらもいっしょに上演すれば、それは大惨事に終わるでしょう。もっとも、「ハリシュチャントラ」のほうを好むなら火遊びはしなくて済みますね。自分のハートの神殿に真理を据えなさい。そうすれば、それはすべての人の間に兄弟らしい健全な気質を生じさせることでしょう。

さて、電球の明かりがまた点きはじめました。電線がすぐに元の状態に戻ったことに皆が満足しているようですね。私は、あなた方がこのパンダル[仮設の大テント]の明かりが早く復旧することをどれほど切望していたか、そして、この薄暗い即席の灯油の明かりの下に座っていなければならないことをどれほど残念に思って気落ちしていたか知っています。私は、あなた方が自分の内面の世界の明かりも切望すること、すなわち、自分の心[マインド]の奥の暗い部分に光を当てる電流を復旧させることを望みます。これはバクティと呼ばれるものであり、光を、明かりを、切望することです。

人々は、自らの無節制や無知が引き起こした病の責任をすべて神に負わせます。しかし、自分が受ける苦難において責められるべきは、自分自身です。苦難はもっぱら無知によって引き起こされます。身体的な病と身体的な苦痛を例に取れば、大部分の病気は、過食、もしくは間違った食習慣の結果と言えます。

ミタ テインディ、アティ ハーヤイ
節食は大いなる満足をもたらす

という格言があります。食物は、清潔で純粋なもの、純粋な手段で準備されたものであるべきです。そして、食物から引き出された力は、神聖な目的へと向けられなければなりません。そうしてこそ、生は価値あるものになります。

食べ物的人格の基

ティヤーガラージャがこの規律を肝に銘じて厳格に守り続けたことを覚えていなさい。ティヤーガラージャは決して自宅以外で食事を摂ることはなく、聖別されていない食物は口にしませんでした。多くの人々は、ティヤーガラージャを非常に厳格で自負心の強い愚か者だと思っていました。しかし、食物を準備する人、取り扱う人がその食物に及ぼす微妙な影響というものがあるのです。そしてその影響は、その食物を口にすると吸収されます。食物は人格の基です。心[マナス、マインド]の状態は身体の状態によって条件付けられます。

80年前に起こったある出来事の話しましょう。バドリーナートに、ハムサラージという名の偉大なヨーギがいました。ハムサラージはつねに神の栄光を歌うことに酔いしれていました。ハムサラージには、同様に熱意と誠意にあふれる弟子がいました。その若い弟子は、数日間ある夢に悩まされて平安を失っていました。その夢の中で、16才の美しい少女が苦悩に満ちてすすり泣き、哀しげに、

「誰も私を救ってはくださらないのですか？」

と呼びかけるのでした。弟子はその不思議な夢に驚愕し、その憂いに満ちた姿と絶望的な叫びを心から振り払うことができませんでした。弟子はグル[導師]にその悩みを打ち明けました。ハムサラージは実際、真のハムサ(天国の白鳥)でした。この鳥は牛乳から水を選り分けることができました。ハムサラージはその識別心によって状況を分析し、弟子の恐ろしい体験の原因を突き止めました。

ハムサラージは、若い弟子の記憶を呼び覚ますために、次のような質問をしました。

「初めてその夢を見た日、そなたは何をしていたのか？ どこへ行っていたのか？ 何を食べたのか？」

その結果、弟子はその日に友人と饗宴に出かけ、そこでプーリーとチャパティを食べたことがわかりました。その饗宴の仕度をしたのは貧しいバラモンでした。ハムサラージは弟子に、そのバラモンがバドリーナートの隠遁者たちのために饗宴の仕度をした理由と、どのような食材を用いたかを確かめよ、と申しつけました。

出された食べ物の出所を調べなさい

弟子は夢が付きまとい始めた日を呪いました。そのせいで、見当違いの物事を調べるための無益な遣いに出されてしまったからです。弟子は、こんな事が自分の霊性修行にどのように役立つのか、と訝(いぶか)りました。そう思いながらも出かけた弟子は、饗宴について、それから、その饗宴が開かれた理由、準備資金などについて調べました。その結果、資金は60才の年老いた金貸しの男によって賄(まかな)われたものであり、バラモンは自分の娘をその男の嫁にやり、その見返りに一万ルピーを受け取っ

ていたことが判明したのです。その娘が、見捨てられた子である自分に少しでも人としての優しさを注いでほしいと、神聖なる人々に訴えかけていたのです。

これほどにも思いがこもる、食物のような贈り物を受け取る際には、その出所や贈られる動機、贈り手の感情のうねりや揺れを確かめる必要があるということ、ハムサラーは弟子に示したのです。

あなた方は、靈性修行者のみがこのような規律を心にとめていけばよいと思うでしょう。それなら私に、

「靈性修行者でない者は誰ですか？」

と尋ねてごらんください。すべての人が巡礼の途上にあるのです。早く進む人もいれば、ゆっくり進む人もいる、ただそれだけのことです。道筋はさまざまであろうと、あなたがたすべてにとって目標は同じなのです。

あなた方は皆、現在の概念に従って文明化され、教化されています。もちろん、現在の生活の仕方と過去のそれには大きな違いがあります。人間は木の皮や葉っぱの服を身にまとっていた時代から遙かな時を旅しました。今は、ナイロンやジョーゼット、ブッシュコート時代です。ですが、これらが皆、より高い文明のしるしだと認めるというのなら、それに相応して思考と感情と行動のレベルが上がっていないこと、生活技術の上昇に伴って心の平安と落ち着きが得られていないことが、あってよいのでしょうか？ 人間の靈的な生活も、もっと文明化され、教化されていなければならないはずではありませんか？ 生命の偶然、自然の美しさや恵みという祝福、そして、もっと長く存続する人生の価値の数々への気づきに対する、感謝の念がなければなりません。感覚の悦楽への執着を捨て去り、内面的な黙想という、もっと長続きする喜びを優先させなければなりません。

祈りは不可能なことを起こさせる

ティヤーガラーは喜びを見出しました。そして、その喜びを、人の心を動かす旋律に乗せた、簡潔で誠実な言葉でつづった歌で表現しました。それは目に涙を、ハートに感動をもたらしました。この祝祭の長であるラームナードのラージャ[王]は、タミル・ナード州出身で、ティヤーガラーが歌ったテルグ語にはなじみがありません。それでも、彼はその歌に深く感動しました。彼はクリティ[ティヤーガラーが生み出した作曲の形式で作られた歌]をとっても愛しています。歌の意味と、その歌をティヤーガラーの崇高な信愛の中からきわめて自然に、きわめて甘く生み出した背景を知ることは、あなた方にその精神をもっとよく吸収させてくれます。ティヤーガラーが歌った言語は、求道者の言語、すなわち、サーダカ[靈性修行者]の言語、もがくサーダカの言語であり、満足した聖賢の言語であることは大変まれにしかありません。あなた方はとても容易に、その言語を、サーダカの言語を、学ぶことができます。それは自分が慣れ親しんでいる言語ではないからといって、距離を置いてはなりません。この語彙の場にも、州と州の間にも、憎しみの居場所はありません。

これは神聖な仕事であり、委員会はそれに加わりました。荷が重いと感ずることも時にはあるでしょう。失望と困難の重さによるめくことさえあるかもしれません。しかし、やる気を失くす理由などないことを、私はあなた方に保証します。シュリーニヴァーサ神は目を開き[あまりにも眼光が眩しいために通常両目は閉じられ布で覆われている]、あなた方の仕事は成し遂げられます。シュリーニヴァーサ神は目を開けません。忍耐し、祈るように待ちなさい。祈りは不可能なことを起こさせることができます。神の栄光を朗唱し、ハートの空洞で神の御名を繰り返しなさい。それは成功をもたらしてくれるでしょう。

1962年4月5日、ティルパティにて
Sathya Sai Speaks Vol.2 C35
サティヤ サイ出版協会